



明治・大正

## 背景

吉野川の支流銅山川の最上流に位置する別子山の別子銅山は、江戸時代の元禄3年(1691)に銅の採掘を開始しました。最初の坑口は新居浜市街とは反対側の南斜面にあり、「歓喜坑」と名づけられました。明治の頃はこの付近が別子銅山の中心で、採鉱と精錬が行われていました。この流域で、明治32年(1899)に土砂災害により、死者513人にのぼる大水害が発生しました。その後、採掘の中心が北斜面に移り、昭和7年(1932)に廃止することになりました。廃止にあたり開発のため伐採された森林を元の緑の森に戻すため植林が行われ、現在は鉱山の遺構は木々に覆われています。

## アクセス

### 別子銅山遭難流亡者碑

- JR新居浜駅より南へ直線距離約3km
- 新居浜市山根町 瑞応寺境内
- 緯度経度 北緯33度55分07秒, 東経133度17分59秒



時は明治三二年(一八九九)、所は愛媛県の別子山村(現在の新居浜市別子山付近)でのことです。別子山村には世界でも有数の銅山があり、多くの人が働いていました。掘り出した銅を含む鉱石を溶かして銅を作る(精錬)過程では、有毒な亜硫酸ガスが発生します。そのため近くの山々の木々は枯れ、あたり一面はげ山が広がっていました。山が荒れてしまったため、人々は大雨が降ったら鉄砲水が出て、ひどいことになると口々に言っていました。

その不安が的中する日を迎えました。その日は朝から降り続いた豪雨が夜になっても止むことなく、ますます激しくなりました。はげ山となり保水機能の乏しい山肌を滝のように雨水が流れ、あちらこちらで山肌が崩れ、恐ろしい土石流となって村々を襲っていききました。別子山村の医師である高原清二郎氏は、これは多くのけが人が出ると考え、胸に浸かるほどの洪水の中を病院に急ぎました。真っ暗な中をやつとの思いで辿り着くと既に多くの人が避難してきています。怪我をした人も多数避難してきており、真っ暗な中で人々は打ち震えていました。なんせなんの明かりもない真っ暗闇の中で、土石流や洪水が流れ下る音だけが異様な怖さを伴って聞こえてくるだけです。

これではかわいそうだと思つた高原医師は病院のどこからともなく使い古した包帯を集めてきました。そして、石油をふり掛けて火をつけるとあたり一面をパツと照らし出しました。まさに地獄に仏で、不安に打ちひしがれていた人たちの顔がすぐに輝き始めました。それとともに、明かりは後から後から避難してくる人たちのいい道しるべになりました。